

ラドスワフ・ブドキエヴィッチ



ナイトメア・トゥエンティーズ

e-bookowo.pl
wydawnictwo internetowe

ラドスワフ・ブドケヴィッチ

ナイトメア・トゥエンティーズ

著作権：Radosław Budkiewicz & e-bookowo

出版社：インターネット出版社 電子書籍owo
www.e-bookowo.pl

連絡先：wydawnictwo@e-bookowo.pl

ISBN 978-83-8166-240-6

すべての権利は留保されています。

複製、一部または全部の配布

無断転載禁止

第1号 2021年

パパのために

第1章

ようやく太陽が西の方に隠れてきました。空は長い間、ピンク色の濃淡でゆらゆらと揺れていたが、次第に暗い色相へと降りていき、最後には強く冷たい紫色になっていた。日の光が薄くなり、夜まではまだ時間がありますが、厚い雲が実際よりも遅い時間の印象を与えています。ほとんどの人や動物にとって、これは睡眠の準備と十分な休息を意味していました。

ほとんどの人のために。

少数の者は--人もゲームも--狩りを始めたばかりだった。

空のかなりの部分を強力な濃密な雲が覆っていて、どこか遠くで絶え間なく迫る嵐の低音のつぶやきが聞こえてきました。咳き込むようなうなり声を伴って、道端で砂利に深いわだちを掘りながら淡々と走っている、古くて使い古したフォードのセミトラックの姿が見えた。ヘッドライトから差し込む黄色の微かな光が、一番近い風景に溢れていた。

ボストンが過疎化を始めた。通りや路地は空っぽになり、家に急いで帰ったり、違法な仕事に就いたりする迷子の男女の避難場所になっていました。自動車は珍しく、大戦時の時代を偲ばせる旧型のセミトラックは、近所に2台あるうちの1台だった。もう一つはクラシックモデルのT型で、低速で逆方向に滑空していました。それが過ぎると、水たまりはそっと水を噴き出した。

セミトラックのハンドルの後ろに座り、男は神経質にリムの上で指を叩き、自家製のタバコをひねりながら重く吸い込んでいた。夕方の薄明かりの中では、彼がどのような顔をしているのかわかりませんでした。彼は確かに赤みを帯びた顔をしていて、まばらな灰色のひげで覆われていたが、まだ灰色のひげが散りばめられていて、古くて擦り切れたヘルメットが額の上に低く滑っていた。春の寒さから身を守るように、厚手のセーターを顎まで引き上げていた。

彼の隣には、ソファの真ん中に、チャップリンに似せた薄い口ひげと、髪を後ろで梳いた髪をした、ずっと若くて細い眼鏡をかけた男が座っていた。ストレスや緊張に屈したくなくて、緊張しながら帽子を手にムシムシしていた。こんなに光が弱くても、彼がここにいるのは仕方がないからだということは完璧に見えていたし、彼もあまり自信を持っていなかった。彼の真逆は第三の男だった。

横の窓際で寝ていた彼は、ヘルメットを顔にかぶり、作業服を着たがっしりとした体格の紳士で、手は油で汚れたパンの切れ端のようなパンの切れ端を持っていた。頬にはヒゲの影がかかっていた。彼の髪は短くて暗く、少なくとも帽子の下から流れ出ている一本筋はそう見えた。汗と魚と油の臭いがしたし、何よりいびきをかいていた。

セミトラックのフロントガラスに春の雨の一滴が落ちてきました。

ボストンの数人の住民は、冷たい水を顔に感じながらも、水たまりからの水しぶきを避けながら、足取りを速めた。車中の3人にとって、雨は特に悪い兆候だった。運転手はクムードになり、ひねりを噛み締めてアクセルを押した。自動車は一度、二度と咳き込み、加速し始めた。

-くそっ、嵐には間に合わないぞ。地面が濡れる！？

-掘りやすいだろう」と、油で汚れた眠い男が呟いた。彼は動いて、伸びをした。浅い眠りをしていたのか、嵐の音で目が覚めたのか。青年は、この会話に参加したいのかわからず、黙っていた。やがて彼は眼鏡を鼻から滑らせて目をこすり、時間を稼いだ。

-ケツ、簡単にはいかない--運転手はつぶやいた。-濡れた土で掘ったことはありますか？初日に足首まで泥まみれになって、さらに悪化するだけだ！

- と言われたので、何度も蹴ったり蹴ったりしました。アイルランド人がまだ港を運営しているとは信じられない...

- ライリーが注文したのか？神に誓って、ごめんなさい。

- とにかく 汚れ仕事をしてくれる若者がいる 君が自分で見つけたんだ スティーブ

- 私が？俺が何だって？- 眼鏡をかけた男が慌てて口を挟んだ。最悪で大変な仕事自分が降りかかってくることを悟った彼は、少し怯えながら先輩を見た。

- あなたと私とアドリアン- 運転手は若者を無視して言った。- 泥を掘るのは悪夢だが、タダではやらない。我々は平等に、3分の1を共有している。

- まあ、それだけのお金があれば、王様のような生活ができます。昔のようにはいかない、仕事が多くてお金がかかる。おい、小僧、前回死んだ奴を調べろよ、突然の新人が来るかもしれないぞ。- 汚れ仕事人のアドリアンは、座席の下に手を伸ばし、少しくしゃくしゃになった破れた新聞を引っ張り出した。眼鏡をかけた男は息を切らして何かを呟き、眼鏡を直し、最新の死亡記事を探しながら『ボストン・クーリエ』をめくった。

ボストンのダウンタウンから離れば離れるほど街灯が少なくなるため、黄昏時（というか暗闇）は小さな文字を読むのに適していませんでした。最年少は目を細めて紙を顔に近づけて持ち上げた。彼はこの作業に数分を費やしたが、その間にセミはスピードを落とし、ポプラとシラカバで覆われた道の脇に車を停めた。エンジンが停止すると、嵐の不吉なゴロゴロ音が大きくなった。雨もだんだんと濃くなってきました。

- ジェサップ・クレイトン・オスティグ65歳、サマンサ・テレーズ・アーウィン42歳、"若者"はようやく新聞から顔を離して話し出した。- その二人だけが最近エバーグリーンに埋葬されたんだよ、コリンズさん」と彼は急いで付け加え、作業員に無用に自分のことを説明した。

- 他にもおそらく半ダースの名無し、ホームレス、絶望的な人がいるだろう。それらは我々が主に懸念しているものです、子供」運転手のスティーブは、ジョイントを噛んで、駐車されたカートの窓の外を見て、補足しました。空虚さと静寂に満足して、彼は微笑んだ。

- でも、教授は新鮮なものにはもっとお金を払っているんですよ！- 彼は真っ先に車から降りてすぐに奥へ行き、大きな麻袋を取り出して背中に投げつけた。彼はセミトラックを降りてすぐに、大きなジュートバッグを取り出して楽々と背中に投げつけたところから奥へと向かった。金属と木の道具がガタガタになった。

- お金は払うけど、気をつけないとね」と運転手は続けて、ドアを後ろにバタンと閉めた。- ホームレスの男がいなくても 魂は神の元に戻ったが 肉体は我々と一緒にいた この言葉を忘れないでくれ ボブ- 暗い空とうねる雲を見ながら兜を直し、地面に向かってヒソヒソと唾を吐いた。小さな水たまりがかすかな光の中でキラキラと輝き、その表面はさらに多くの雨粒で振動していた。

眼鏡をかけた青年が最後に自動車を降りた。不本意ながらも、まるで恐怖心を抱いているかのように。目の前の作業の前に温めておきたいと、手にゴボウを持ってバンの中に手を伸ばし、スコップとバールとつるはしを手に入れた。彼はうめき声をあげ、すべてを腕に抱えようとしたが、数歩踏み出すとすぐに、道具は大きな音を立てて濡れた地面に落ちた。

- 畜生！- と震える声で罵った。彼は身をかがめて散らばった機材を集めようとしたが、柔らかい、しかし衝撃的な光がその場に溢れてきた。眼鏡をかけた男は、ストームランプを高く掲げて運転手の燃えるような顔を警戒したように見ている。彼はただ首を振って周りを見回していた。誰もいなくて静かだった。墓地の周りには、ツタや雑草が生い茂った立派なレンガと石の高い壁があり、全体が錬鉄製の巨大な門で覆われていました。

しかし、ここには装飾品も天使も十字架も聖人もいませんでした。もちろん上のクラスの人にもいましたが、稀にいました。アドリアンは鎖と南京錠を壊せるのかと思いながら、しばらく門の前に立っていた。

しかし最終的には肩越しに唾を吐いて壁に沿って移動し、小高い丘に向かった。レンガの壁は少し低めでしたが、根っこや緩い石、泥などに気をつけなければなりません。雨

はまだごくわずかに降っていたが、これはすぐに変化する可能性があることを念頭に置いておかなければならない。三人の強盗は一刻も早く墓地に行かなければならなかった。

坂道を登るのは簡単ではなかったが、それも障害ではなく、一番難しかったのは荷物だった。罵声、喘ぎ声、唾を吐きながら、壁にたどり着くまでには、おそらく45分以上かかった。壁を乗り越え、装備品をすべて運ぶのにさらに45分ほどかかった。

-年を取りすぎたな」と運転手はうめきながら、3人の中で最後に墓地に入ったときに膝をついた。ネクロポリスの古い部分には、過去の19世紀にさかのぼり、最も多くの墓と個人葬の礼拝堂がありました。割れた壁、崩れた階段、破損した彫刻、磨耗した碑文、錆びた縁など、そのほとんどが悲惨な状態であったが、歴史を扱っているという印象を受けないわけにはいかなかった。

スティーブは十字架のしるしをして短い祈りをした最初の人であり、最も忠実な人でした。他の人たちはししぶしぶ彼のジェスチャーを繰り返す、機材を集め、貧しい者や忘れ去られた者たちが埋葬されている新しいセクションへと道を下っていった。数メートル歩くと、強盗たちは安心感を増し、道路からは誰も彼らの姿を見ることができなくなった。墓地を守っていた見張り番は、たいていカンティーナでヴォルステッドの健康を飲みながら、嵐の雲をちらりと見ているだけだった。

犯罪者にとっては、タイミングがピッタリだった。

暗くなり、本格的な土砂降りが始まろうとしていましたが、年季の入ったカエデやモミジ、スプリースが広がり、嵐のランプの眩しさを消していました。かなり厚い層で地面に横たわっているそれらの木の針は、連続した雨の滴と一緒に、男たちの足音を静かにしました。雷が鳴っても、誰も聞いていないし、見ていないのは明らかだった。

ほとんどの路地は狭くはなかったが、それも広いとは言えない。棺桶や棺桶を運ぶための馬車にちょうどいいくらい。大通りに出て轍や蹄跡を辿って目的地に到着するだけで十分だったが、泥が容赦なく靴に付着し、行軍は困難を極めた。

-まあ、子供は、仕事を得る - アドリアンは静かに水たまりを形成し、水たまりを形成し、もちろん最初を避けて、濡れた地面にツールを使用してバッグを投げて、言った。刹那、眼鏡男から装備の一部を取り出し、墓の列を見渡しながらスコップを地面に突き刺した。

-ここではない、頼むから」とスティーブはヘルメットを脱いで汗ばんだ額を拭いて訂正した。-クリスマス前に死んで、もう虫に食べられている。今度は食べた死体の代金を教授が払ってくれません。そこを掘るんだ 最初は少女、次に農民だ- 彼はまず、おおよその死亡日が書かれた簡単な板を指差し、次に路地の反対側の端にある土の塚を指差しした。

-どうやって知り合ったの？あの教授？-アドリアンは鼻の下で何かを口にし、一瞬後には皆が素早く効率的に仕事をしていました。まるで棺桶を掘り出したり、遺体を奪ったりすることが彼らにとっては日常茶飯事ではなく、恐ろしくも当たり前のことであるかのように。

-ショーンのためにやった冬を覚えてるか？-スティーブは素早く地球を反転させながら答えた。-リビー・マレーのやつだよ

-リビー、覚えてるわ股間がまだ燃えている。

-ショーンは何度か言っていたんだけど、変化が起こるって。神様が私たちのような人たちのために降りてきて、チャールズのようにお金が流れるようになるって。どうにかしてうまくいった」と彼は締めくくり、スコップをポケットに入れて額の汗を拭いた。

- どういうわけか」コリンズは仕事を止めずに繰り返した。筋が通っているように聞こえた、それが犯罪ビジネスのやり方だった。コネクションを介して紹介を通していわゆるロコミです。眼鏡をかけた男は黙ったまま会話を聞いていたが、顔はどんどん薄くなっていった。違法な仕事を想像していたわけではありません。

30分近く経ってからシャベルが安物の松板を叩いた。汗だくで疲れた三人は休憩を取り、危険を冒していたが、かなり効率的に素早く仕事をこなしてくれた。冷たい雨が汗や土の粒子を洗い流してくれるように、顔を空に向けて持ち上げた。アドリアンは袋の中に手を伸ばし、琥珀色の液体が入った牛乳瓶を取り出した。

- 密造酒の取引をしてる 黒んぼを知ってる 信用してくれ- その言葉を確かめるように、彼は瓶を傾けて大きくガブ飲みした。彼は不思議そうにボトルを渡した。青年はしぶしぶ酒を受け入れ、少し飲み込んで、うなり声を上げてフーッとした。アルコールは稲妻のような強さで、苦く、油っぽく、奇妙な金属的な後味がありましたが、それは目的を果たしていました。他の二人は、首を絞めている少年の姿を見て大声で笑った。

- よし、そうだ、死んだ女を連れ出して、まだ耐えられるうちに不運な女を始末しよう。片手にバール、もう片手にハンマーを持って、真っ先に立ち上がって飛び降りた。彼はもう一度身を乗り出し、ポケットからロザリオを取り出し、数珠の上に指を走らせた。そして、それを片付けて、平らになった金属の棒を板の間に巧みに滑らせた。

右端のハンマーで何度も何度も叩いた。割れた木がパチパチと音を立てた。そして、力づくで抜いた釘がガタガタになり、蓋が崩れ、雨が強くなってきた堅穴の壁から土や泥が落ちてきた--短い休憩が悲惨な結果をもたらした。

青年は、経験豊富な友人を時折ちらりと見ながら、反対側の木と格闘していた。一方、3人のうち最後の1人は、ランプを手に、仲間のために地面に空いた穴を照らしながら見張っていた。暗闇に慣れた視力と、明るい光に襲われない視力で、彼は監視員や他の似たような「起業家」を簡単に見分けることができました。彼はそれを知っていた彼は、木材のパチパチという音と土砂崩れのカクカクという音がすぐに止まることにも注意を払わなかった。

雨が降る音と時折聞こえる嵐のざわめきが、このシーンに適切な陰鬱な背景を提供している。そして、これは真実には遠く及ばなかった。

- スティーブがささやき、アドリアンの注意を引いた。青年は重く喘ぎながら、目を疑って開かれた棺をぼんやりと眺めていた。中には、もちろん砂や泥は数えていませんが、体がありました。若い、まだ時の歯に噛まれたわけではありませんが、少し青みがかった頬をしています。同行者の行動を心配した作業員は、墓の方を向いて身を乗り出し、ランプを照らした。曲がった松の板で作られた箱は、一見すると警戒するようなものではありませんでした。

問題は、男性陣に妊婦が現れたこと。

-それは何ですか?- アドリアンは運転手に向かって唸りながら降りていった。彼は泥や石を気にせず、むしろ暴力的にショックを受けた若者を押しのけ、しゃがみこんで残りの板を引きちぎった。彼は墓の中に若い妊婦の遺体が入った棺があるのを見た。作業員は息を切らして罵声を浴びせ、肩越しに唾を吐き、またもや不協和音のようなものを呟き始めた。

昼夜を問わず港で働く労働者として、性格も神経も鋼のように強かったが、墓に横たわる妊婦の姿に心を乱されていた。彼が死体を引っ張り出して売ったのは最初でもないし、おそらく最後でもないだろうが、このような事件に遭遇したのは初めてだった--母娘の死体を盗んだが、妊娠が進んでいる女性の穏やかな顔を見ることはなかった。

彼女の膨らんだお腹には、世界に出てくる準備ができている子供の体が隠されていた。

ちびっ子の人生は、それが良かれと思って始まる前に終わってしまった。

それは本当に悲劇で、おそらくボブの突然の故障の直接的な原因だったのでしょう。彼は慌ててピットから這い出てきて、泥まみれになりながらも必死に地面を手でつかんでいた。また雷が鳴り響き、稲妻が空を切り裂き、墓地を一心不乱に白く照らした。

-畜生!- 青年は泣きながら膝を落とし、アルコールが支配する胃の中のお粗末な内容物を吐いた。彼は仰向けに転がり、咳をして体中を震わせ始めた。これが彼の初めての経験でした。彼は現金を切迫していて、お金を稼ぐための選択肢はそれほど多くはありませんでした。

彼は眼鏡を捨てて顔をぎゅっと閉じ、冷たい雨に身を委ねて少し落ち着かせた。泣き崩れないように必死にもがいていた。

- どこで手に入れたの?- と、イライラしたコリンズが尋ねた。

- そうするだろうと思っていました」と運転手さんはガツガツ言っていました、実際にはそうはいきませんでした。- もう若くはないし、長くは続かないし、誰かが私の代わりをしなければならない、競争は眠らないことを知っているでしょう。- 再び唾を吐いて、体を

寄せるように板と地面を動かし始めた。彼は女性を腕の下に入れ、慎重に、そしてほとんど優しく、そして棺から持ち上げ始めました。

作業員は躊躇することなく、その直後に故人の足をつかんで、濡れた土の壁を登りながら仲間をビレーで縛り、穴から這い出て遺体を引きずっていった。誰も時間を無駄にすることなく、彼らもまたすぐに作業に取り掛かり、穴を埋め始めました。

- おい、小僧！ さっさと出てこいよ！

- ジーザス、彼に1分を与えてください」と、スティーブはシャベルにもたれかかって、猛烈に笑いました。

- 知るかよ！ 自分で全部やらないからな！（笑）。 - 掘ったばかりの墓に別の土の塊を放り込んで、同じように攻撃的な口調で答えた。

眼鏡をかけた男は、恐ろしく長い時間、じっとしていた。その時だけ、彼は不器用に膝について眼鏡に手を伸ばした。それでも膝について、震える手で十字架のサインをして、経験豊富な強盗団を見ていた。

- 私は・・・無理だと思います・・・神様、悪臭と・・・--弱々しい声で繰り返し、顔面を流れる雨に涙が混じっていた。彼は頭を上げて、ようやく死んだ女性の顔が見えるまで、申し訳なさそうな視線を送った。これは彼のためにあまりにも多くのことだった、彼は上昇し、増加する速度で、泥の上を滑って、離れて歩き始めた。

- おい、小僧、戻って来い！ - 運転手は最悪の事態を察知して泣いた。

- 誰かを連れ去ったな！ - アドリアンは叫んでシャベルを投げ捨て、慌てた眼鏡の男を追いかけた。遺体の墓を強奪することは、簡単でも楽しいことではありませんでしたが、このようなパニックはおそらく誰も予想していませんでした。彼はすぐにパニックに陥った男に追いつき、開いた手のひらで彼の顔を一度殴り、再び彼を平手打ちしようとしたとき、青年は絶望的な降伏のジェスチャーで両手を上げました。アドリアンは殴ろうとした手で固まった

- お願いします！

- 何を？

- 無理だよ、本当に！ コリンズさん、お願いします！

- お前のせいで時間を無駄にして全てを危険にさらしているんだぞ！

- 失礼します！

- 謝罪なんてどうでもいい！ シャベルを持って俺たちと一緒にやるか、ワゴンに行って俺たちを待つか、もしどこかに逃げたとしても、俺がお前を見つけて空の棺桶がどこにあるか知っていることを忘れないでくれ」と彼は吠えて、若い眼鏡をかけた男を引っ張って、ついに彼を解放した。青年はふらついて泥の中に落ち、一瞬恐怖で麻痺して立っていた。

ようやく頷いて、ゆっくりと掘られた墓の方に戻っていった。イライラして疲れたアドリアンは友人の元に戻り、二人は-nomen omen-重苦しい気分仕事を終えた。数分後には全てが終わっていた。辺り一面の踏みつけられた土と、濡れた砂と泥に刻まれた無数の足跡がなければ、おそらく誰も墓が掘られているとは思わなかっただろう。

強盗団は不運な場所から離れ、大きくため息をつきながら、再び仕事に取り掛かった。

- 男と女じゃないとダメなの？ 最初の死体ではダメなのか？ どうせ俺たちはもうダメなんだ--アドリアンは静かにシャベルを投げ込んだ。

- 最近亡くなった男性と亡くなった女性にお金を払ってやっているんだ」と運転手は、もう一つの土のスコップを投げ捨てて不機嫌そうに言った。彼はまた、神経質な眼鏡をかけた故障寸前の男の方を密かにちらりと見た。背の高い港湾労働者の脅しはアドリアンの唯一の職業が墓荒らしではなかったからだスティーブはこのことを知っていたが、少年は推測することしかできなかった。

ついにシャベルが別の棺桶の板にぶつかった。

1、23つだ

そして、もう一つ。蓋の木は金属の打撃の圧力でうめき声をあげ、最後には内側に倒れて離された--ボールで遊んでいる暇はなく、単純なブルートフォースが使われていた。強盗団は、それが自分と死体に何をすることを知っていて、すぐに反応しました。アドリアンは飛び

降りることさえした、そうしないとシャベルが体に当たってダメージを与える可能性があるからだ、誰もそれを望んでいなかった。教授は破損品に金を払っていたのではなく、新鮮なものに金を払っていた。良い、全体的に、研究に適している、またはそれが何であれ、彼がやっていたことは何でも。

作業員はピットの泥壁に背中をぶつけた。湿った土と泥を四方に撒き散らし、それは若者を酔わせて落ち着かせるだけだった。彼は重く喘いでいて、工場の機械の一つのように胸の中で心臓が高鳴っていた。眼鏡をかけた男はすぐにピットから這い出てきて、死体を見ようともしなかった。

- 飲み物が必要なんだ」とアドリアンはつぶやいて、棺と砕けた板に目をやった。

- 濡れた額を拭いて運転手を確認した。- 若者よ、自分を便利にしてくれ、一升瓶をくれ--彼は眼鏡をかけた男にもっと大きな声で投げかけた。今、雨は波打って降っていました。強度が上がったり下がったりするわけではなく、何よりも不便でした。

二人は棺桶にたどり着き、自分たちに小休止を許した。アルコールはそのような状況で助けられた - 恐怖や不安を抑制し、麻酔をかけ、無関心の快適な羽で心身を覆った。掘ったり運んだりするのも、少し大変でしたが、2つに分けて行うことができました。彼らは、彼らの中で最も若い人の助けを頼りにすることはできませんでした。

しばらくして--必要以上のリスクを冒すつもりはなかった--彼らは中断していた仕事に戻った。二人は棺桶から残りの板を剥ぎ取り、横ひげを生やした大人びた男の遺体を見て、意味深な視線を交わした。

これは良心の呵責で大金を手にする人だった。

- 重い野郎で、そうは見えなかった！- アドリアンはうめきながら、死体を大きな防水シートの上に置いた。スティーブは経験豊富な葬儀屋の腕前で遺体を包み、一瞬だけ故人の頭にロザリオを置いた後、背筋を伸ばして両手を背中に押し付けた。遅い時間になり、雨は着実に降っていたが、少なくとも嵐は横を通り過ぎていた。遠くの雷と雷は楽観的だった。

それが呪われた夜の唯一のポジティブなことだった。

- 帰るの？- 眼鏡の男は静かに尋ねた。

- 帰りますよ、誰かに何か言ったら自分でその墓に入ることになりますよ--作業員は唸りながら、無造作に素早く墓穴を埋めていった。土の山が多かれ少なかれ正しい形になると、彼は息を呑んで死体に手を伸ばした。太って上品に着飾った男の死体を、彼は鳥肌が立つほどの腕前で肩越しに投げた。

妊婦の死体は他の二人に落ちた。運転手は手に唾を吐きながら、タープに巻かれた体を持ち上げ、少年が同じことをするのを待っていた。春の雨が降りしきる中、彼はうめき声をあげながら立っていた。青白い顔に嫌悪感を滲ませながら、彼は壁に向かって這いずり始めた。

。